

「一年のはじまりにあたり」

岐阜高山教務所長 海老原 章

今年も、除夜の鐘の音とともに新年を迎えました。本年もよろしく願いいたします。

私自身、昨年あたりから目が見えにくくなり、物忘れも顕著になり、老いを実感するようになりました。知人のある方が、数年前から足が衰えられ、一昨年膝関節の骨折が判明し、しかしながら人工関節に入れ替える手術もできない状況でも、何とか日々のご法務をこなしておられました。昨年に入り足の状態は余りすぐれず、その後杖の力を借りて歩いておられました。最初是一个の杖でありましたが、次第に両杖の杖を使つての歩行になられました。その後入院されることとなり、数カ月間入院生活を余儀なくされる中で、やはり筋力が落ち、自力で立っていることもままならない感じでした。

その方は、そんな身体になったことを嘆いていました。「なんで、こんなことになってしまったのだろうか。これまで、幾度となく聴聞し、また様々な場へご法話のご縁を頂戴し、仏法をお話させていただき、こういった物事の道理、老いや病のことは、当然自分自身わかつていたつもりでいたが。」と。

その方は、ご自身としても、「老病死」について、これが知識としてどうこうということではなく、確かなものとして自分に迫ってきている実感がわいてきている、とも語られていました。

ある掲示伝道につきのような言葉がありました。「老病死、当たり前のこと

とが、ただ事でないことを、身体から教えてもらった このごろ。」

人間生まれて時がたてば年を取り、病む身であり、そしていつか死んでいく。年を取り、病んでみて、はじめて身体で実感し体験していく。そういうことがただ事でない、ということを経験して身体から教えてもらった、ということでしょうか。

「年を取る」ということは、若いうちにはわからなかった。色々な苦しみ、淋しさ、むなしさ、を身体で味わっていく。体力の衰え、気力の衰え、そして心は過去が忘れられず、今の時代に合わず、頑固になり、また孤独になっていく。

しかし、年を取ると暗い心ばかりでなく、年を取ればこそと、喜びも味わえる、と知人は言っておられました。

今から十年ほど前の『同朋新聞』に掲載された記事のことが思い出されます。それは、97歳になるご門徒さんの記事。そのお方はお内仏の前に座り朝夕のお勤めは欠かさず。そして何よりもお寺に足を運ぶのを楽しみにされておられるとのこと。お寺で法要が勤まると、デイサービスをお休みしてでもお寺へお参りをされるとのこと。その理由は、「お話を聴くのが楽しい。お参りの味は、お参りしなければわからない。」と。

「老病死」に翻弄されながらも、これがお寺へ足を運ばせる機縁となっている。人生の味わいとなっていく道として、私たちに教え示して下さっているのではないのでしょうか。